



覗く眼

第3回

第3回-1

「最初は、動物か何かの切り身が捨てられてある、と思ったそうです」

田部はようやく、死体の様子を口にし始めた。

「第一発見者は、やはりこの村の人ですよ。酒宴の帰りだったとか」

「酔ってたのか」

沢井が確認をする横で、源治が口を挟む。

「ええ、酔ってはいましたがね。でもそう思っても無理はないです。何しろ、現場にはこのぐらいの肉片がたくさん散らばってるんですから」

田部は皺の細かく入った自らの人指し指と親指とで、輪をつくって見せる。

「そんなに小さいんですか」

「大きさはいろいろです。これより大きいのもあれば、小さいのもあって・・・」

田部はまた、言葉を詰まらせる。

「まあ、食いモンさばくよう均一に、なんていかんだろ」

源治は音をたてて、茶をすする。

「とにかく、そんなのが川べりにたくさん散らばっていたんです」

田部は沢井の方を見ながら話す。

「県警の調査では、肉片の数は百点以上だったとか」

「ええ、そのぐらいはありました」

「それで、死体そのものも同じ場所にあったんですね」

「はい」

頷きながら、田部は口を手で押さえ、大きく息を吐いて続けた。

「いろんなところの皮膚や肉が剥ぎ取られて、切り刻んであって。まるで野ざらしの死体が、獣や鳥に食い散らかされているような状態でしたね」

「こんな村だ。実際に、食われてたんじゃねえのかい」

また源治が口を挟む。

「いえ、おやっさん。死体にはまだ少し体温が残ってたそうです。そんな状態ですから、殺された時間まではハッキリしないんですが」

源治のぶしつけな言葉に田部がムツとした顔をしたのを見て取ったのか、沢井が説明する。

「まだこんな寒い季節だ。温かかったって事は、時間はほとんどたっていないだろう。殺すだけならまだしも、切り刻んでいる暇なんて無えはずだがな」

源治はまた、茶を音をたててすする。飲み干した湯のみから田部に催促するように目を向けると、田部はすぐに気づいてつぎ足す。

「人影とか、凶器とか、証拠になりそうなものも一切見つかってないんですね」

「はい」

田部はまるで、沢井に聞き込みをされているようだ。

「ところで、田部さん」

「はあ」

源治の声の調子が、急に変わった。

第3回-2

「この村に、顔中に包帯を巻いて、なんていうかな、体がこの・・・」

「ああ、それなら」

源治はあの奇妙な包帯の輩のことを説明しようと、胸から下が急激に細くなった体のことをどう表現しようか考えている間に、田部の方がすぐにわかったらしい。

「知ってるんですか」

沢井も身を乗り出す。

「佐倉様ところの、若様ですよ」

田部の口調は、さっきまでとは打って変わって軽やかだ。

「佐倉様ってのは、なんでい」

源治がまた、べらんめえ口調で問いかける。

「はい。ここら一帯の大地主様です。何しろここいらの山や田畑。そうですね、三分の二ぐらいは佐倉様のものじゃないでしょうか」

「ほう。けどそりゃあおかしいな。戦後の農地改革があつたのに、そこまで地主が所有してるってのは」

「ここは見ての通り田舎でしょう。ですから、農地改革も手が回らなかったようで」

田部が苦笑いする。

GHQが強権を発動したとはいえ、一部の農村までには手が回らなかったというのは、源治も聞いた事がある。

「なるほどなあ。それで、その佐倉って家はこの村では未だに名家ってわけかい。で、若様ってのは」

「はい。佐倉様の家の二男で、歳は、二十を少し過ぎたあたりだったと思います」

「ほう、それであの包帯と、この・・・」

源治はまた説明しづらそうに、自分の胸のあたりに掌をあて、軽く上下させた。

「はあ、何でも生まれたばかりの頃に酷いご病気になられたとの事で、体もあのようによせ細り、お顔にも大きな痣があるとかで」

田部の顔が曇るのに引きずられるように、沢井も神妙な顔で頷く。

「それなら、生まれた時からあんななのかい」

「ええ。子どもの頃からずっとお顔には包帯を巻いてらっしゃいます。お外にもあまり出られないのですが、お会いになったのですか」

「はい。ここに来る途中で」

農地改革の話題から口数が少なくなっていた沢井が、ようやく口を開いた。

「そうですか。今日は少し暖かいですから、ご気分が良いのですかね」

田部は我が子を思うように、穏やかな顔になっている。

「しかし、学校なんかはどうしてたんだ」

源治は佐倉の若様について、尋ね続ける。

「学校には籍だけ置いて、通われていません。ただお屋敷と一緒に住んでいる親戚の方に学校

の先生をされていた方がいらっしゃいますので、その方が勉強はすべて見てらっしゃいました。つきっきりですし、元もと有能な血筋ですからね。普通の子どもより、おできになりますよ」

田部は身内を自慢するような口ぶりだ。

「するってえと、オツムの方は全然問題ねえんだな」

「もちろんです」

源治が頭を指差して言った言葉が気に入らなかったのか、田部は目を吊り上げた。そして源治の続ける言葉に、田部はますます目を尖らせる。

「運動なんてのは、できるもんなのかい」

「もちろんですよ。そりゃあご学友と一緒に何か運動をするってのはありませんけどね、お体は問題ございませんよ」

「じゃあ、病気ってのは今はどうなんだい。 治ってるのか？」

「さあ、そこらあたりはよそ様のお家の事ですからね。ただ、頭とか普段の生活に影響は無いはずですよ。ただ、その容貌が・・・」

田部がまた、我が子を思うように顔を曇らせた。